

マラヤ大学 オンライン研修  
研修報告書(2020年夏)

CONTENT-BASED COURSE

田中幸希 安西俊輔

## 目次

a. プログラムの概要 .....	2
b. プログラムのハイライト .....	4
c. 研修体験・成果 .....	5

## a. プログラムの概要

このプログラムはマレーシアのマラヤ大学が主催する”Summer Enrichment Program”という、オンライン型の海外体験プログラムであり、2つのコースからなるが、この研修報告書は、Content-Based Courses の方である。(もう一つのコースは、English Language Courses である。) 2020年の9/14から10/2までの3週間に渡って行われ、学生はマレーシアと日本の2カ国から参加していた。授業は月曜日から金曜日の、計 15 日間であり、1日に2つの授業が行われた。授業時間は、日本時間で9:30~11:30と12:30~14:30であり3週間で計60時間の授業が行われた。

このプログラムでは、同じ授業を履修する、マラヤ大学の学生5~7人がローカルバディとなり、3週間の研修を共に行った。また、授業後に、1時間程度のアクティビティを3回催してくれ、マレーシアの文化を、いろいろな面から紹介してくれた。さらに、日本人学生一人につき、ローカルバディの中から一人が、バディとして研修期間中のサポートを行ってくれた。

授業は、English for Employment, Report Writing Skills, Strategic Communication, Politics and International Relations, Southeast Asian Studies, Presentation and Public Speaking, Introduction to Media Studies, Gender and Masculinities, Media and Crime の9科目の中から自分が好きな2科目を選ぶことができた。(ただし、授業時間がかぶっている2科目を選択することは不可。) この報告書ではその中で私たちが履修した Southeast Asian Studies と Strategic Communication について紹介する。

### Southeast Asian Studies

(講師: Dr. Abdullah Khoso)

本授業では、東南アジア諸国の、地形や地理、人々、民族構成、人口動態、言語構成、宗教(特に、宗教の歴史や種類など)、移民や移住、文化、食べ物、ASEAN を含む貿易やビジネス、政治やそのしくみ、家族構成、マレーシアについて、スライドを見ながら教授の講義を聞いたり、教授が用意してくれた YouTube 上の教材を見たりしながら学習した。また、毎週金曜日はセミナー形式の授業が行われ、教授があるテーマ(言語構成や世界遺産)について、学生一人一人に東南アジアの国を割り当て、それぞれが7~10分程度のプレゼンテーションを行った。授業は、教授の講義を聞くだけでなく、教授から質問をされ、それについてみんなで議論することもあった。研修の中間と最後にテストがあり、記述式か MCQ (Multiple Choice Question)かを、先生ではなく学生が決めることができた。授業の評価は、出席10%、中間テスト40%、最終テスト50%であった。

## Strategic Communication

(講師:Ms.Nur Hakimah、私達は Ms.Hakimahと呼んでいた。)

本授業は火曜日～金曜日は通常授業で、月曜日はプレゼンテーションをする形式であった。通常授業では Strategic Communication について、様々な具体例を用いて例えば、企業の広告戦略や緊急時の対応、そして勧誘するための方法等を題材にし、分析的に解説してくれた。授業は受け身ではなく、随所に質問があり、また身の回りにある製品について宣伝してみよ、戦略的な広告(CM)を見つけてきて、どのように戦略的であるかを述べよなど、予告なしにミニプレゼンをする機会がかなりあった。そのほかに計 2 回テストがあった。いずれも選択型と筆記型であった。テストは授業で扱った内容の確認であるため、さほど難しくはなかった。月曜日のプレゼンテーションは、一人 10 分ほどの長めのプレゼンをする機会であった。2 回あったのだが、テーマは自分の選んだ企業の広告戦略、そして SNS と広告であった。いずれも自由度が高く考えることが多いテーマであった。評価はプレゼンが 40%、課題が 20%、テストが 40%であった。またこの授業は2時間の講義であったが前半 30～50 分程度は面白いニュースやうんちくを共有する時間であったので、リラックスして過ごすことができ、また英語での日常会話の練習にもなった。

## b. プログラムのハイライト

### 良い気分転換となったレクリエーション (理学部 2 年 田中幸希)

概要で述べた授業の他にも週に 1~2 回、Strategic Communication と Southeast Asia Studies のクラスメイトたちとレクリエーションを行った。例えば、お互いの国、観光地、文化、伝統、食そして歌の紹介などをした。食の紹介では、実際にお互いの国の伝統的な食事を用意して目で味わいあった。歌の紹介では国歌以外にも幼少期に聴いていた曲やいわゆる名曲をお互い YouTube で流しあいリズム感を楽しんだ。

また、バディーとの交流も楽しんだ。日々のラインやインスタグラムを通じた交流はさることながら、通話してたわいもないことで盛り上がりたり、お互いの住んでいる町をバーチャルに散歩しながら案内したりした。

### ローカルバディからのおもてなし (農学部 2 年 安西俊輔)

今回のマラヤ大学での研修の中で、私が最も思い出に残っていることは、授業後にマラヤ大学の学生が行ってくれた、アクティビティである。マレーシアのことをたくさん紹介してくれた。ひたすら英語を話したり聞いたり 2 時間の授業が終わった後のセッションは、とても良い息抜きになった。マレーシアの食べ物を写真だけでなく、実際に用意して、食べている様子などを見せてくれたり、宗教色を顕著に感じられる、伝統衣装などを実際に着て披露してくれたら、写真で見ると、ずっとマレーシアを感じることができ、とても印象に残っている。また、ある時は、ただ予定があるかを聞かれ、何だろうと待っていたら、ビデオ電話がかかってきて、マレーシアの海に連れて行ってくれた。日本の海と、色も含めてあまり違いはなかったが、灯台を見せてくれたり、画面越しに写真を撮ってくれたり、小さな旅行をととても楽しむことができた。そして、アクティビティの度に、みんなで写真を撮り、とても良い思い出となった。

ちなみに、研修が終わって数日後が、僕の誕生日だったのだが、その日も覚えていてくれて、みんなから祝福のメッセージをもらい、とても素敵な誕生日を送ることができた。とても温かみのあるローカルバディとは、研修が終わった後も、ずっと、交流を深めていきたいと感じる。そして、いつかマレーシアに行って、みんなに直接会える日が早く来ることを願う。

## C. 研修体験・成果

英語で授業を受け、プレゼンし、テストを受けるということ

理学部 2 年 田中幸希

このプログラムの参加目的は、東南アジアやコミュニケーションについて知識を得ることであったが、英語で授業やプレゼンテーション並びにテストを受けるという経験ができたことが最も印象に残った。普段日本語で済ませていることが、英語になった途端にこんなに大変なのかと感じつづけた三週間であった。メモしなければ授業に?ついていけなくなるため、2つの講義の内容を記していくうちにノート一冊を使い切った。毎日 4 時間の授業の他に、2 時間ほど復習に当て、もう 2 時間ほどは課題に取り組んだ。この経験は今後?必ず役に立つとすることができる。この報告書では、具体的に私がこの研修に参加したことで得ることができたことについてお話したい。

まずは英語を道具として授業に向かうことが、ものすごく大変であるということをもっと知ったことである。大学二年生にして、このことに気づいたことは人生の財産といえる。実際の英語の世界に飛び込んでできること、そして何ができずに、まだ足りないのかが明確になったことが成果である。他には英語で応答することやプレゼンテーションすることに慣れ、例えば大学の英語の授業のプレゼンテーションなども余裕と感ずることができた。そしてプログラムをやりきったことで、自分の中に英語に対するポジティブな感情が芽生えた。嫌でも英語で授業を聞き、英語の資料を見る 3 週間であったので、例えば YouTube で英語の TED を見ることも、英語で書かれた web ページを閲覧することも、余裕綽々でできるというわけではないが、これらのハードルが下がったことは間違いない。以前までなら英語で TED など見る気すら湧かなかったのだから、自然と自信がついたのだろう。

また、全体的な行動力がついたと思う。この3週間でとりあえずやってみるという精神が涵養され、アクティブな人間になれた気がする。そのほかにもマレーシアのバディーと仲良くなれた。Line と Instagram でいまでも繋がっているし、これからも繋がることことができる。私のバディーは偶然にも日本が大好きで、これまでも日本に留学等で来たことがあり、コロナが終息すれば、来日し再会しようと話した。このような繋がりは英語を学び続けるモチベーションにもなるし、財産にもなると思う。

私は将来、海外留学したいと考えて、その擬似的な体験ができればと思いオンライン研修に申し込んだ。パスポートもいらぬし、家でも受講できる。そして、費用も安い。私のようにいつか留学したいと考えている人には、確かに本物の留学にはかなわないが、手軽さとコストパフォーマンスの高さから、このようなオンライン研修はおすすめである。

## 苦勞の中で、得られたもの

農学部 2年 安西俊輔

今改めて振り返ってみると、このマラヤ大学でのオンライン研修の3週間は、いろんな苦勞があったが、それと同時に、とても実りのあるものであったとも感じる。

まず、海外への渡航経験のない私にとって、日本語が通じない環境というものは、初めてであり、どのような研修になるのかは全く想像がつかなかった。研修初日、マラヤ大学のローカルバディの人たちとの顔合わせがあり、そこで、本当に英語しか通じない状況から、オンライン上であっても、とても孤立感というものを感じた。しかし、マラヤ大学の学生たちは、私が英語を上手に話せなくても、温かく迎え入れてくれたため、不安や緊張感をかなり和らげることができた。また、とてもエネルギー豊富な人たちが多かったことで、自然と自分も明るく元気になることができた。

こうして始まった研修であったが、まず一番最初に苦勞したのは、英語が思っていた以上に聞き取れなかったことである。マレーシア特有のなまりを若干含んでいたこともひとつの原因ではあるが、それ以上に、ネイティブが日常で話す英語というのを聞く機会があまりなかったことが大きかった。最初の頃は、英語を聞き取るだけでも精一杯で、授業が終わった後は、頭も体も強い疲労感を感じた。慣れない環境というのもあって、最初の一週間くらいは、なかなかしんどかったが、それでも必死に食らいついていこうとしたことが、まず最初に成果として現れた。2週目の後半くらいからは、英語が以前よりも、耳からすんなりと入ってくることを実感したのだ。もちろん、自分が知らない単語などがあると、意味が理解できないということもあったが、そのたびに辞書で調べる等、努力を怠らなかつたため、少しの上達が見られたと感じた。

また、授業に関しては、今まで深く学ぶことがなかった、マレーシアを含む東南アジアのことについてや、身近な企業がどのようなコミュニケーション方法で、顧客を増やしたり、利益をあげたりしているかなどについて、勉強することができた。英語のみで自分が知らないことについての授業を受けるのは、初めてであったため、一度授業を聞くだけでは、難しい部分もあり、授業後に友達と復習したり、自分でスライドを見返したりするなどして、乗り切ることができた。特に大変だったことは、週に1回のセミナーで、与えられたお題に対してプレゼンテーションを10分程度行うことや、期間の中間と、最後に行われたテストである。プレゼンテーションに関しては、かなり時間がかかり大変な作業であった。3週間で、5つのプレゼンテーション資料を実際に作成した。ただ、この経験から、英語でのプレゼンテーションの作り方や定型のようなものを知ることができたり、また英語を日常言語のように、当たり前を感じることもできたりした。そして、テストに関しては、コミュニケーション授業の方は、英語での記述の大変さを実感した。東南アジア授業に関しては、現地学生の人たちも難しいと感じるくらいマニアックな問題等もあったが、授業のまとめを協力して作っていたために、簡単に解けた問題もあった。

マラヤ大学の方たちにとっては、日本人留学生がいるということであれば、日本のことについて興

味を持つのは当然である。中には、日本のアニメが好きであったり、実際に日本に来たことがあったりする学生等もいた。もちろん、日本のことに関しては聞かれば、比較的すぐに答えることができたが、宗教や歴史などに関しては、自分の日本に対する理解の浅さを感じた。むしろ、マラヤ大学の学生の方が詳しいということさえあった。また、ただでさえ、英語にまだあまり自信がないなかで、内容に関しても自信がなかったり、日本語で聞かれても曖昧だったりすることに関して、英語で考えながら話さなければならないことは、とても大変であった。これを機に、世界に行くというのは、日本を代表して行くくらいの知識をもっていたいものだと痛感した。

今回の研修では総じて、どちらかという、リスニング力の方が鍛えられたと感じている。そのため、アウトプットの練習は、もっと必要であると感じた。また、研修期間中は、日本語より英語に触れているということもあり、そのことによって、英語を、自然に受け入れられるような体にもなっていたと感じる。自分の英語力は、まだまだ改善点があるというのを強く実感したからこそ、この研修をしっかりと生かせるように、今後も英語の勉強を続けていきたいと思う。